

北陸学院第一幼稚園におけるキリスト教保育の実践

Teaching Practices of Christian Education in Hokurikugakuin Daiichi Kindergarten

出 村 るり子*¹ 千 場 瞳*² 橋 本 綾 華*³
楠 本 史 郎*⁴ 太 田 雅 子*⁵

Abstract

This paper will review certain teaching practices and examine the degree to which these practices succeeded and remained consistent with the aim of Hokurikugakuin Daiichi Kindergarten. The kindergarten's aim: Children are to be fostered a heart of thankfulness to God for His blessing and protection. Children are guided into building interpersonal relationships; first, by being personally accepted and then by encouragement to extend this acceptance and sympathy to others.

In this paper, the central concept of Christian education of this kindergarten is described by the director, then presents episodes of how children grasped scriptures, believed God and through their behavior demonstrated scriptural comprehension in their daily lives. The paper contains a list of hymns sung by children. Also included is a list of Bible verses and stories told by the president and chaplain of the school.

キーワード：神の存在が感じられる園の雰囲気／共に成長する場

はじめに

北陸学院の幼稚園は1886年、明治19年に開園し、来年125周年を迎える。北陸学院第一幼稚園は、日本で最古の私立幼稚園であり、日本におけるキリスト教幼児教育・保育の始まりと位置づけられている。

この長い歴史を築いできたのは、使命感に生きてきた人々であった。それぞれの時代と社会の中で、小さき存在とされていた子どもたちを愛し、共に生きることを喜びとし、それを自分自身の人生の

意味と結び付けて働きに携わった保育者たちであった。子どもたち一人ひとりを神様から託された大切な存在として捉え、養い・育てる働きに真摯に向き合ったのである。また、人間にとって真の幸福とは何かについて考え、共に生きることに価値を見だし、育ち合うことのすばらしを味わって来たのであった。

125年を区切りに、このスピリット・姿勢を今一度確認したいと考える。同時に次の時代に向けて保育という働きを各保育者が自らの使命・ミッションとして捉え、専門性や人間性を高めて行くことを、さらに子どもたちの育ちにとってより良い、より豊かな環境を皆で一緒に創り上げることを目指したいと思う。

そのためには、まず現在自分たちが実践しているキリスト教保育の内容を振り返り、そこから新たな課題を見つけるという作業を行う必要があると考える。特に第一幼稚園の教育方針のうち以下の2点を検証したい。①「感謝の気持ちを育てる：

*¹ DEMURA, Ruriko
北陸学院第一幼稚園

*² SENBA, Hitomi
北陸学院第一幼稚園

*³ HASHIMOTO, Ayaka
北陸学院第一幼稚園

*⁴ KUSUMOTO, Shiro
北陸学院第一幼稚園
北陸学院大学

*⁵ OOTA, Masako
北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童教育学科
保育原理

毎日賛美歌をうたい聖書のおはなしをきき、お祈りをして礼拝の時を持ちます。また、自然の変化が動植物との触れ合い、友だちとの交わりなど日々の幼稚園生活を通して、いつも神様に守られていることを感じとり、感謝の気持ちを豊かに表現できる子どもを育てます。」②「人間関係の原点を学ぶ：子ども自身が、自分を大切な存在として受け入れられていることを感じ、他者を受け入れることや思いやりの心をもつなど、人間関係の原点を学んでいきます。」本稿ではこれら二つの教育方針に焦点を当て、実践に対する評価を行う。北陸学院第一幼稚園におけるキリスト教保育の捉え方、子どもの育ちの姿、保護者の理解、実践事例（保育のエピソードと教師の気づき）について記述する。さらに礼拝における讃美歌と全体礼拝の聖書の話（聖書箇所）の年間リストを提示する。

北陸学院第一幼稚園におけるキリスト教保育の捉え方

日々の保育の中で、共に祈り、賛美歌を歌い、聖書の言葉を聞き礼拝を行っている。生活の中心は礼拝にあると言えるが、日々の生活を通し、さまざまな体験の中で神さまの愛を感じ、またイエスさまの教えが生きている。一人ひとりが神さまから愛されていることを、子どもたち自身が感じとることができるようにと考えている。

具体的には次の5つをねらいとしてあげて実践している。① 子どもたち一人ひとりが、大切な存在として受け入れられている経験をする。② イエスさまを身近な存在として知り、共に歩もうとする思いを伝える。③ 自分と他者の違いを認め、一緒に生活をする。④ 子どもが自発的に考え、創造的に物事に関る。⑤私たちが生きる世界を神の恵みとして受け止める。

教師の心構えとして、以下の7点に留意している。① 保育者が礼拝を大切にする。② 喜びと感謝をもって保育に携わる。③ 神さまの存在を感じとることができる環境作り。④ 自然との出会いを作る。⑤文化との出会いを作る。⑥遊びを通して、共に育ち合う経験ができるようにする。⑦一人ひとりの子どもの姿を理解し受け止める。

育ちの姿

1. 家庭での様子

子どもたちは幼稚園で覚えた聖書の話、聖句（聖書の言葉）を家族に伝え、家庭でも祈りを実践しており、そうした子どもの言葉や態度が保護者に影響を与え伝道に繋がっているのだと思う。以下に保護者から寄せられたいくつかのエピソードを紹介する。

① 4歳児クラスのAが、クリスマスの時期に母親に対して次のように語ったというのである。

「わたしは神さまから大切なものをたくさんもらっているんだよ。その中でも人を助ける力をもらっていることが一番うれしい！お友だちが転んだとき、大丈夫？と手を貸してあげられるからね。」普通はおとなが子どもに他者への配慮や思いやりを示すことを教えるものであるが、親のほろが我が子から教えられたと感動を交えて話してくれた。これは、その週のクラスの礼拝の中での私たちにイエス様が与えられたことの話聞き、子どもたちがそれぞれに感じ受け止めていたのだと思う。『神さまからのおくりもの』『小さいもみの木』の絵本を読んだ後、話し合いをした。神さまは、私たちに色々なものを下さっている。その子だけに特別に与えられている贈り物があることを教師が伝えた。それに応答して子どもたちは次のような感謝の思いを表現していた。「食べ物を食べられる力をもらいました。嫌いなものでも少しずつ食べられるようになりました。」好き嫌いの多かった子「素敵な手をもらいました。お祈りができます。絵を描いたり、お片づけのときに机をはこびます。」

② 3歳クラスのBは家でひとり祈っていた。母親がそっと近づいてその祈りを聞いてみると、弟をだっこすることができる手を与えてもらったことを感謝していたというのである。喧嘩ばかりしていたのに、弟を思いやることができる子に成長したのだと大変喜んでいた。

③ 卒園が近づいたある日、Cの保護者の方から次のような話が伝えられた。「小学校(公立)に入ったらイエス様や神様のお話が聞けなくなるねと私が話すと、息子は『ママ、イエス様はどこに行っても僕と一緒にいるんだよ。だから僕は大丈夫なんだよ。』と答えたのです。私は息子のこの言葉

にととても感激しました。』

④ 最近4歳で途中転入をしたDについてである。この子の兄は本園の卒園児であり、Dは赤ちゃんの時から保護者会など、母親と一緒に来園していた。しかし、本園が自宅から遠いこともあり、家の近くの別の幼稚園に入園したのであった。母親によればD自身は本園に入園するとばかり思い、それを楽しみにしていた。他園にいったん入園したものの、やはりDが望んでいる園に入園させたいと考えたとのことであった。Dは初日から一日を楽しんで過ごし、来て3日目にして、幼稚園で習った賛美歌を家で口ずさんでいたという。Dにとって機会あるごとに聴いていた賛美歌が身近なものになっていたと感じる。

病気の友だちのために家でも祈り、「お祈りしたから〇〇ちゃんはきっと元気になるよ。」と話していた。自分のために祈って欲しいために「幼稚園をお休みしたい!」と言っていた例などその他にも数々の逸話がある。家庭での様子が伝えられる度に、子どもたちにとって、聖書の言葉や祈りが日々子どもたちの生活の中に浸透していることに気づかされている。

2. 卒園時の姿

子どもたちは卒園を前に、将来の夢や希望を語り、「おもいで」(卒園記念文集)にそれらを記している。そこには、幼いながらも他者のために生きたい、神様に用いられたいという願いが表現されている。以下にいくつかの例を紹介する。

◆「はたけをつくるひとになりたい! おおきなはたけをつくりたい。おおきなはたけをつくって、たべものがないひとたちにたべものをわけてあげたい。せかいじゅうのみんながげんきにうらやましいから。はたけは、くうきのいいところにつくる! たとえばもり! まちは、はいきガスが

いっぱいあるから、はたけはつくれないよ。」(男児)

◆「おいしゃさんになりたい。びょうきのひとをたすけてあげたい。ひとにやさしくしてあげられるひとになりたい! すごくすごくつらいひとでも、すこしつらいひとでも、うけいれてあげるびょういんにしたい。げんきにしたい。だって、げんきになったらうれしい!」(女児)

◆「せかいじゅうにかみさまのことばをつたえるひとになりたい。“よろこびひろげよう”の4だいの“みことばつたえよう”のことばがすてきだとおもって、みんなにつたえなくなった。こまっているひと、たべものないひと、ハイチのひと、ニカラグアのうちをじぶんでつくっているひとが、しあわせにくらせるように。やきゅうせんしゅをしなげら、つたえる。やきゅうせんしゅになって、60コおべんとうをつくり、はんぶんは、まわりのひとにあげる。」(男児)

3. 保護者の理解

保護者のほとんどはキリスト者ではない。そのために、キリスト教主義の幼稚園であるとわかっていても、子どもたちと一緒に礼拝を守ることや聖書の話をする事等に対して疑問や抵抗を示される方たちもあった。しかし保育者たちが毅然とした態度であたりまえのことをあたりまえとして行う。すなわち、日々神様の恵みのもとに生かされていることを感謝し、共に礼拝を守りながら神様の言葉を聴き、祈ることを行ってきた。このことを通して、子どもたちの内に神様への信頼と人々を思いやる心が育って来たのだと考える。こうした愛の心の育ちや共に生きることのすばらしさを感じ取っている子どもたちの姿を見て、大人(教師・保護者)が子どもから多くのことを教えられている。

実践事例：礼拝の主題・暗唱成句・ねらい・エピソード記録

5歳児ゆり組の実践より

主題	2009年12月 喜び
聖句	神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された (ヨハネによる福音書3章16節)

ねらい 神さまの大切なお子さま、イエスさまの誕生を祝い、喜びをわかち合う。
 神さまの深い愛を知る。
 神さまの愛を受け、自分たちができることを考える。

年長児の子どもたちが行うページェント（聖誕劇）は子どもたちにとって特別で、強い思いがあったようです。子どもたちは年少組の時からページェントをすることに憧れていました。しかしその憧れだけで役を決めようとしていたので、クリスマスを迎える間、クリスマスの意味やイエスさまの誕生の喜び、イエスさまは生まれた時から十字架に架かることが決まっていたこと、私たちの罪を背負って十字架にかかってくださったことを伝えました。それゆえに神さま、イエスさまの愛は計り知れないことを子どもたちに話しました。

その時、子どもたちはいつになく真剣な表情で聞いているようでした。「イエスさまって僕たちのために十字架に架かったんだよね。」と言い聖画をじっと見つめている子もいました。自分たちの罪を背負い十字架にかかったことを知った子どもたちは誕生のお祝いという気持ちから感謝の気持ちへと変わって行ったのだと思います。

憧れで演じたいという思いからではなく、次第に子どもたちの心には大きな変化が現れ、自分が周囲の人々にイエスさまの誕生の喜び、神さまの愛を伝えたいという思いに変わってきました。

みんなで力を合わせないと伝えられないという意識をもって、その日からクリスマスまでの間自分がしたい役を一生懸命に表現していました。その中で、やりたい役が重なる時もありました。一緒に演じてみたり、相手に「すごく上手だね。役がぴったりだよ。」と励まし合う姿も幾度となく見られました。「羊飼いは一番はじめにイエスさまが生まれたことを聞いたんだ。それはすごく嬉しいこと、この喜びを伝えたい。」とひたすら羊飼いを演じる子もいました。その姿を見るたびに子どもたちの中で物語の意味をしっかりと理解をして演じていることに気づかされました。「今日もページェントしたい。」「讚美歌うたいたい。」「みんなでこころを合わせて歌おう。」「『イエスがこころに』の讚美歌を歌っていると心が温かくなって涙がでてくる。」「クリスマスって嬉しいね。」など毎日のように話していました。

クリスマスの集いの当日、いつになく緊張しながら登園してくる子どもたち。子どもたちはページェントをし、クリスマスのメッセージを伝えたいという思いでいっぱいだったようです。

一人ひとり舞台上で堂々と自ら選らんだ役を演じ、みんなの力が合わさったページェントになりました。

クリスマスの集いが終わった後、「あのね、ページェントしてる時にママの顔を見たらママが泣いていたの。ママが泣いているのを見て、自分たちが伝えたいことが伝わって嬉しかったよ。」「讚美歌うたっている時にみんなの心が一つになったよね。みんなで伝えられて嬉しかった。きっと今日来れなかったAちゃんもおうちで同じ気持ちだよね。」などと話してくれました。

クリスマスを通して一人ひとりがかけがえのない存在であること、イエスさまの誕生が、私たちをどれほど大切に思っているかという神さまの愛の表れであることに気づく時となりました。友だちと心を合わせて、伝えたこのページェントを通して子どもたちの心は大きく成長したと考えます。次は神さまの愛を受け、自分ができることを探して行って欲しいと思います。今後の課題ともなりますが、もっと丁寧に個々の内面に目を向ける必要があったと感じています。クリスマス物語やページェントを演じることに関して教師が意図し伝えたことに対してそれぞれの受け止め方が異なっていたと思います。一人ひとりの子どもたちの姿をよく観察したり、会話をする中から、個々がどのように感じたり、理解したかを探り充分な配慮ができるようになりたいと考えます。

主題	2010年1月 取り組む
聖句	喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい (ローマの信徒への手紙12章15節)
ねらい	社会の事象に関心を持つ。 自分たちにできることを考える。
	<p>ハイチ時間2010年1月12日、日本時間13日にハイチでマグニチュード7.0の地震が起きました。その翌日子どもたちにハイチという国で大きな地震があった事を伝えました。沢山の人が死に、沢山の家が壊れ、怪我をしている人々が多くいること、食べる物に困っていることを話しました。ニュースを見て知っている子、まったく知らない子とそれぞれではありましたが、とても真剣に話を聞いていました。</p> <p>以前の能登半島地震の経験を思い起こし、「地震ってこわいよね。」「ぐらぐら揺れて、グジャグジャになってしまうもんね。」「ハイチってどこにあるのかな?」「ハイチの人たちは大丈夫かな?」っととても心配していました。世界地図を広げたり、地球儀を見たりして「ここがハイチの国だ!みんな来て。」と互いに教えあう姿も見られました。</p> <p>その日から毎日のようにハイチの人たちのことを話し、子どもたちと祈りました。家でニュースを見て来た子どもたちが、「今もまだ、何回か地震が起きているみたいよ。」「食べ物もぜんぜん足りないってテレビで言った。」「お母さんから、日本から助ける人が行っているって聞いたよ。」っと皆に知らせていました。クラス全体で幾度となくハイチ地震について話し合いをしました。</p> <p>やがて、子どもたちは自分たちにも何かできる事はないのかと考えるようになりました。そのことをきっかけに子どもたちと一緒に自分たちには何ができるかということ話し合いました。</p> <p>「ハイチの国は遠い。自分たちが行くことはできないよね。」「手紙を書きたい。」「大丈夫だよ!って言ってあげたい。」「自分たちが集めた献金を送りたい。」「毎日、お祈りする。」「お祈りすることが一番大切だよ。」と自分たちの思いを話してくれました。</p> <p>それから毎日必ず「先生、お祈りしたい。」と言いハイチの人々のために祈りました。「神さま、ハイチで沢山の人が死にました。まだ、生きている人もいます。どうかハイチの人たちを守ってください。」「ハイチの人たちは今食べる物がありません。どうか一人ひとりを守ってください。」「けがをしている人が沢山います。どうか、早くよくなるようにお守りください。」などと自分の言葉で祈っていました。</p> <p>子どもたちは社会の事象に関心を示し、自分たちにできることは何かと考えていました。誰かのために考える、相手の気持ちになるということは簡単なことのように難しいことだと思います。日頃から神さまが傍にいて守ってくださっていること、友だちや自分の大切さ、自分自身が他者から認められ愛されていることを経験している子どもたちだからこそ、他者を思いやることができるのだと思います。困っている人がいたら、そっと寄り添ってあげられるような人になって欲しいと願います。「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」の聖句のように自分のことだけではなく、周りの人と喜びや悲しみを分かち合いながら大きくなって欲しいと思います。</p>

主題	2010年3月 輝いて
聖句	光の子として歩みなさい (エフェソへの信徒への手紙 5章8節)
ねらい	神さまの守りの中で大きく成長した喜びを感謝する。 神さまに愛されていることに感謝し、自分たちができることを考える。 毎日を喜び過ごし、新しい生活に期待を持つ。
	<p>年長組になった頃、相手のせいにしてたり、相手の嫌がることを言って喧嘩になることも多くありました。また、自分のことばかり主張する姿も見られました。</p> <p>年間を通して、みんな違っていいんだよ。ありのままの自分が素敵なこと、神さまはそんな一人ひと</p>

りを愛してくださっていること。一人ひとりにはその子にしかできないことがあること。自分自身にしかできないことを一生懸命やってほしい。神さまや多くの人から喜ばれる人になれるように子どもたちに伝えて来ました。子どもたちはクリスマス、日常の遊びや生活の中で他者を認める経験を沢山し、話し合い、それぞれの役割があり、みんなで力を合わせることの喜びを学んで来ました。その中で一つの良いきっかけとなったのは次のような出来事でした。互いに認め合い自分のことだけではなく、相手のことを思いやってほしいと思い、『友だちの良いところがし』をしようと提案しました。毎日、一人の子どもについてみんなで良いところを見つけるようにしました。

「私が困った時、優しく話しをしてくれたよ。」「アイデアがいっぱいあって一緒にいて楽しい。」
 「小さい子ども達に優しい。」「笑顔がかわいいよ。」「泣いた時、話を聞いてくれてうれしかった。」
 など一人ひとりに合った良いところ沢山見つけました。言われた子どももとても嬉しい表情で聞いていました。それに伴い少しずつ子どもたち同士の関わりも変わって行きました。

3月、卒園も近づき子どもたちと「大きくなったら何になりたい？どんな人になりたい？」「小学校にいったらなにがしたい？」など新しい生活に期待を持たせながら将来についての話し合いをしました。子どもたちはじっくり、じっくり考えていました。そして誰かのために何かをしたいと発言する子が出てきました。

「お医者さんになりたい。病気の人を助けてあげたい。人に優しくしてあげられる人になりたい。」
 「畑をつくる人になりたい。大きな畑を作って食べ物がない人たちに食べ物を分けてあげたい。」
 「優しい人になりたい。困っている人がいたら、話を聞いてあげられるような人になりたい。」
 「賛美歌を聞かせてあげたい。温かい気持ちになるよ。」
 「世界中に神さまの言葉を伝える人になりたい。世界中の人が幸せに暮らせるように。」などさまざまな答えが返ってきました。

「これからも神さまが傍にいてくださるから、強くいられる。大丈夫」と語る子どもたちもいました。口々に「ゆり組、みんな大好き。」と叫んでいました。

幼稚園の3年間で子どもたちは神さまの深い愛、多くの人からの愛を沢山受け成長して来ました。その中で他者の良いところ、弱いところを認め受け入れ合うことができるようになりました。幼い子どもたちではありますが自分のことだけではなく、相手のことも考えられるように成長していたことを嬉しく感じました。いつまでもイエスさまにしっかり繋がって、自分にしかできないことを見つけて行って欲しいと思います。

主題	2010年9月 つながって
聖句	キリストに結ばれて歩みなさい (コロサイの信徒への手紙 2章6節)
ねらい	北陸学院125周年の歴史を知る。 神さまの守り中、125周年歩めたことに感謝する。
	今年北陸学院は125周年、そして、第一幼稚園は124周年を迎えました。125年の間、神さまに守られここまで来られたこと、沢山の人の祈りと思い、熱意があったことを子どもたちに伝えました。 アメリカからミス・フランシナ・ポーターが幼稚園を建てるために来たこと、教師をまず探さないといけない事や初めはなかなかうまくいかず、幾度となく困難に直面したことを話しました。また、初めは数人から始めた幼稚園の良い評判が広がり段々と大きくなっていき、それが今の第一幼稚園になった。今でも続いている日本で一番古い幼稚園だと伝えました。 100年史を見ながら写真を見たり、125年前の子どもたちになって劇もしました。 「小さな種からこんなに北陸学院が大きくなったのは神さまが傍にいてくださり、守ってくださったか

らここまで来られたんだよ。嬉しいことだよ。とても素敵なことだよ。神さまに感謝だよ。まるで大きな木のようなだね。」伝えると、「うん。幼稚園に来られて嬉しい。」「どんな思いで幼稚園を建てたの？きっと大きく大きくなって欲しいって思ったんだよ。」「楽しい幼稚園にしようと思ったんじゃない？」「125周年のお誕生日だね。誕生日は嬉しい。」などと子どもたちは応えました。

子どもたちと共にフラシンナ・ポーターや今まで北陸学院に携わってきた人たちの思いについて。今自分たちができることについて考える時となりました。

感謝の気持ちを表現すると共に、これからも北陸学院が大きくなって行って欲しいと願い、一人ひとりが『詩』を作りました。まずは、子どもたち一人ひとりの思いを聞き、共に言葉を考えました。

「ちいさなたねから こんなおおきくなりました すごくちいさくて やわらかい そのたねは つちのなかで どんどんせいちょうした おおきくなってきになった はっぱがいっぱいげんきなみんなをまもってくれる そのたねは だいいちようちえんになりました」

子どもが発した言葉から、さらにその子の思いや考えを引き出すために、「神さまがまいてくれた種はどんなたね？」「どんなふうが大きくなったの？」「どんな木なの？」などと言をかけて行きました。すると、次から次へと言葉が出、思いも溢れて来たのでした。

<子どもたちが作った詩>

◆「ちいさなたねから めをだして こんなおおきくなってくれてありがとう ポーターせんせい ようちえんをたててくれてありがとう かみさまありがとう そのおかげでようちえんに たくさんともだち ふえているよ」

◆「ながいれきしからこんなおおきくなるよ こんなにながいれきしをありがとう ポーターせんせいありがとう いままできてくれたみんなありがとう かみさまいっぱいいっぱいありがとう 50メートルありがとう だいいちようちえんをつくってくれてありがとう」(※50メートルは子どもにとってとても大きいという意味です。)

◆「かみさまがたねをうえてくれたから125しゅうねんここまでこれた こどもたちはおともだちがほしいとおもった かみさまはこどもたちのことをおもった こどもたちがうれしくなるように ようちえんはたのしい たのしいようちえんをつくってくれて ありがとう」

◆「おおきく おおきく おおきなあれ だいいちようちえん かたくじょうぶ つよくおおきくなってね こわれたら みんながあそべなくなる ようちえんはたのしい わたしたちがそつぎょうしてもかよってくるひとたちがげんきにあそんでほしいな ずっと ずっとおおきくなってほしい」

◆「うれしい こんなおおきくなったから かみさまがまもってくれたから おおきくおおきくなれた かみさまがまもってくれたから けがをしているひとも ないているひとも おこっているひともわらっているひとも みんなまもってくれる かみさまだいすき」

◆「125さい うれしい それはほくじゃなくてようちえん さんびかうたって おいのりして おいおいしょう みんなでおいおいしょう たのしくおいおいしょう おめでとう」

◆「サワサワサワ おとがする やさしいおと だいいちようちえんからきこえてくるよ ころころ おとがする やさしいおと はっぱがころがる カチャカチャカチャカチャみんなであそんでいるおと ずっときこえていきますように」

125周年というちょうど節目の年に子どもたちと共に北陸学院の歴史の重みを味わうことができ幸いでした。今までもそしてこれからも神さまの守りがあることに感謝をし、過ごしていきたいと改めて思いました。

聖書の話・讃美歌

北陸学院第一幼稚園の園児全員・教職員による全体礼拝を毎週1回・水曜日の午前中に行っている。全体礼拝では園長（学院長・宗教主事）が聖書の話をしている。月・火・木・金曜日は、クラスごとに礼拝を行っている。以下に2009年度～2010年1学期の全体礼拝の聖書の話、讃美歌のリストを表示する。

2009年度北陸学院第一幼稚園・園長による全体礼拝

月	日	聖書箇所	内容	備考
4	15・水	ヨハネ 20:19-23	復活した主が弟子たちに現れ「大丈夫、平和があるように」と言われた。いつも一緒にいて声をかけてくださるイエスさまと一緒におられる。	
	22・水	ヨハネ 20:24-39	主が復活したという弟子の話信じないトマス。主が「私に触っていいよ。信じなさい」と言われた。主は今も生きて「信じなさい」と招いておられる。	
5	6・水	マルコ 1:16-18	ガリラヤ湖で魚をとっていたペトロに主は「私についておいで」と言われた。ペトロはすぐに従う。上手にできなくてもいい。主のお手伝いをしよう。お家でも。	
	13・水	エフェソ 6:2	お母さんの仕事: 食事・洗濯・掃除・買い物・子育て。一生懸命家族のために働く。それは皆を愛しているから。神も愛される。一生懸命働いて下さる。ありがとう。	母の日
	27・水	マタイ 5:14	夜の登山。暗い。でも月が出てきて明るく照らす。登れた。でも月は太陽の光で輝く。主イエスが太陽。その光を受けて私たちは輝き、暗闇のなかでも歩くことができる。	
6	10・水	マタイ 6:28-29	花はきれい。でも育てるのは大変。朝顔を育てている、その苦勞。皆が持ち寄った花もだれかが苦勞してこんなにきれいに咲いた。神が咲かせられた。だから皆、嬉しい。	花の日
	17・水	マタイ 3:1-2	いつも幼稚園の外がきれいなのは草刈・掃除・雪かきをしてくれる人がいるから。主イエスが来られる前、ヨハネが皆の心の掃除を。だから聴ける。皆のためのお仕事感謝。	
	24・水	マルコ 1:12-13	主がヨハネから洗礼を受けた後、荒野で何も食わず40日過ごす。サタンの声。「石をパンに変えたら？」主は「違う」と。サタン声は強い。でも主が「違う」と言って下さる。	
7	8・水	詩編 148:3	山の上で見た星は空一杯。星座、天の川、赤、黄の星、明るい、暗い星と様々。どれも神が造られた。地球も海も陸も。草木も虫も動物も人間も。皆守って下さる。感謝。	
	15・水	ルカ 6:20-21	主は「貧しい人、飢えている人、泣いている人は幸せ」と。変だ。主イエスが一緒にいて満たして下さるから幸せ。泣いている人も笑わせて下さる。主と一緒に。嬉しい。	
9	2・水	ヘブライ 11:7	神がノアに「洪水が来るから舟を作りなさい」ノアは作る。人は笑う。「山の上に舟？」ノアは信じた。神の言の通りになった。神の言を聞こう、笑われても。	
	9・水	詩編 111:10	タイの通りで子供が運転者に物売り。学校は？昔の金沢にも学校に行けない子供が大勢。ポーター先生が主イエスの幼稚園を作ってくれた。この幼稚園がそう。感謝。	創立記念
	16・水	ヘブライ 11:7	すぐ遊びに飽きる子。漂う舟からノアが鳥を放す。でも水だらけ。鳥も鳩も戻る。しかしあきらめず放す。鳩が木の葉をくわえ戻る。次は帰らず。上陸。あきらめずしてみよう。	
	30・水	ヘブライ 11:8	ウルに住んでいたアブラムに神は「出て行きなさい」行先も分らず、年をとっていたが砂漠へ出て行く。神は「おいで、やっごらん」と。大丈夫、できる。神と一緒にだから。	
10	5・水	ヘブライ 11:9	テントは寒い。風で倒れる。雨がもる。アブラムの家はテント。一生テント生活。でも神と一緒にいて守って下さる。だから大丈夫。神の言を求めて動いていこう。	
	19・水	ヘブライ 11:12	アブラムは百歳。子供が生まれぬ。でも神が約束。それを信じた。イサクが誕生。大喜び。神に感謝。誰もが喜ばれて生まれてきた。両親、そして神が喜んでおられる。	
	26・水	ヘブライ 11:17	神がアブラムに「息子イサクを捧げなさい」アブラムは従う。でも神がイサクを守られた。神は守って下さる。「どうしてこうなの？」と思う時も。	
11	4・水	ヘブライ 11:20	イサクはテントを張り井戸を掘る。大変。やっと水が出る。でもその町の人たちが奪う。イサクは怒らず別の所で井戸を掘る。主イエスも。だから怒らず友達を作り続けよう。	
	11・水	1テサ 5:18	一杯の野菜と果物。どこから来た？店？畑？作物を作るのは大変。一個一個、大変な苦勞がある。愛がある。それを届ける。神の愛を分け合おう。	収穫感謝
	18・水	ヘブライ 11:20	ヤコブは兄エサウからご飯一杯でお父さんのものを全部取ってしまう。エサウが怒り、ヤコブは何十年も逃げる。苦しい。神が助けて兄と仲直り。ヤコブも神が分るように。	
	25・水	ヘブライ 11:21	兄から財産を奪ったヤコブ。苦しい逃亡生活。でも神が祝福。結婚。子供が12人も。兄と和解して故郷に戻る。息子が12部族の先祖に。神が赦して見守って下さる。	
12	2・水	マタイ 1:23	ヨセフはマリアと結婚する予定。だがマリアは神の子を産むことに。ヨセフは困る。でも結婚。主がヨセフの子になられた。私たちと同じに。全部分って下さる。	待降節
	16・水	マタイ 2:1-3	誰でもクリスマスが好き。でも嫌いな人も。ヘロデ王。博士から聞く。自分が王でいたいから。でもクリスマスが好き。一緒にお迎えしよう。	待降節
	17・木	ルカ 2:6-7	主イエスのお誕生おめでとう。羊飼いと博士が訪問。なぜ分った？救い主を楽しみし、空の星を見、天使の言を信じたから。主にお会いするのは楽しみ。会いに行こう。	降誕礼拝

1	13・水	マタイ 8:14-15	ペトロのお母さんが風邪をひいて高熱。主が看病され治る。病気で寝ている時、お母さんが看病。安心。嬉しい。主も一緒。治して下さる。嬉しい。	
	20・水	マタイ 8:23-24	主と弟子が舟で向こう岸へ。天気が荒れ風が吹きつける。舟は揺れ進まない。もうだめ。主は寝ていた。起こすと風と波を静められる。荒れる時も主は一緒に。	
	27・水	マタイ 9:16	子供の時飲んだコーヒーは苦かった。大人と子供、好きなものが違う。古い服に継ぎを当てるには古い布、新しい服には新しい布。主は各々に必要なものをご存知。	
2	3・水	マタイ 9:29-30	ハイチ地震で閉じ込められた人がお祈りして待ち救われた。神を知り祈れば待てる。主が必ず助けて下さると分る。祈ろう。主は助けて下さる。	
	10・水	マタイ 26:33	ペトロは主が捕らえられてもついていくと誓う。だが実際は怖くなり逃げた。「大丈夫」と言ったのにダメなことあり。主は赦される。一緒にいて守って下さる。優しい。	四旬節
3	4・木	マルコ 14:3	主が弟子と晚餐中、女が入ってきて壺の香油を主にかけた。弟子は失礼だと叱る。だが主はお喜びに。大事なものを捧げたから。私は何を捧げようか。	四旬節
	10・水	マタイ 27:32	シモンが囚人の行進を見物。倒れた一人の十字架を担がされる。ひどい目にあう。後に妻と息子が主を信じる。シモンも。主の十字架を担いだと話す。良かったと思う。	四旬節
	17・水	マルコ 15:24	参観日を嫌がる子。母の顔に火傷の痕があるから。母が話す。赤ちゃんの息子を助けるため火傷した。聞いて母の顔が誇らしくなる。主の十字架も誇らしい。	四旬節

2010年度北陸学院第一幼稚園・園長による全体礼拝

月	日	聖書箇所	内容	備考
4	14・水	ヨハネ 20:19	主が十字架に。弟子は怖くて家にこもる。そこで復活の主が現れ「大丈夫」と挨拶。挨拶は嬉しい。毎日、先生に友に、主に挨拶しよう。元気になる。主が一緒だから。	復活節
	21・水	マタイ 4:4	主が荒野で悪魔の誘惑を。「石をパンに変えればいい」でもパンさえあればいい？ 神の言があって人は生きられる。一緒に聞いていこう。	
	28・水	マタイ 4:5-7	宝物なのに大事にしない。「大丈夫」と平気。なくして母を責める。変。悪魔が主に飛び降りても神が守ると誘惑。違う。できることを自分でする。主が守って下さる。	
5	12・水	マタイ 5:3	主イエスは「貧乏な人は幸せ」と。そう？外国で2か月暮らした。肉なく魚なく米と粟ばかり。お米の美味しさを知る。毎日神は恵みを下さる。苦しい時、それが分る。	母の日
	26・水	マタイ 4:8-10	すぐ「いいなあ」と羨ましくなる子供。悪魔が主に言う。「私を拝めば何でもあげる」でもいいものは神だけ。主が一緒。だから負けない。一緒に真直ぐ進んでいく。	
6	2・水	マタイ 4:19-20	頼まれると「えー？」と言う子。主が手伝う人を捜す。ペトロ兄弟に声をかける。主がお呼び。「えー？」と言わない。喜んで従う。主に呼ばれたらすぐついていこう。	
	9・水	マタイ 6:29	花の種は虫に食べられる。葉はちぎられ、茎は折れる。でも神が守ってきれいな花を咲かせる。立派な実をつける。神は守って育てて下さる。ありがとう。	花の日
	16・水	マタイ 5:13	塩は味付け、防腐、色鮮やかに、隠し味になる。でも脇役。融けてなくなって働く。主に従う人は塩。自分は解けてなくなる。でも他を生かす。なくてならぬ。私たちも。	
	30・水	マタイ 5:14	嵐で停電。真っ暗に。心配。ロウソクをつける。ほんのり明るく心もほっとする。主を知る人は光。周りを照らす。人の心がほっとする。主イエスを伝えよう。	
7	8・水	マタイ 5:17	ドッジでボールに当たっても外に出なかったら面白くない。決まりがあるから楽しい。神の決まりは皆が仲良くできるため。守ろう。感謝して友と楽しく遊ぼう。	
	15・水	マタイ 5:21-22	ネパールの国に水道がない。毎日汲みに行く。大変。主は「殺すな」とは人を大事にすることと教えた。一緒に水道を作った。水が出た。嬉しい。神も喜ばれる。	

讃美歌 2009年～2010年7月

年齢 月	3歳児(こどり組)	4歳児(たんぼぼ組)	5歳児(ゆり組)
2009年度4月	おかあさんだいすき 幼II ちいさいおでて 幼 おいのりしましよ 二2 はなもとりもめがさめて 幼	どもちいつぱい 幼II あそんでいても 幼II おかあさんだいすき 幼II かみさまがわかるでしよ 幼 もりもおやまも 幼	ありがとう 幼II ちいさなあかちやんだったのに(B) 幼II おかあさんだいすき 幼II このままの姿で ワーIII さあてをくんで 二2 もりもおやまも 幼
5月	もりもおやまも 幼 おでてをパチパチ 幼II このはなのように 幼II	ちいさなはなが(A) 幼II このはなのように 幼II	ちいさなはなが(B) 幼II このはなのように 幼II どんなにちいさい 二2 そのかすいづくつ 幼 しすかにしすかに 二1 しゅにしがうことは 改二
6月	おはよう 二2 うみでおよく 幼 かみさまにかんしや 二2 あつちのいえから 二2	うれしいあさよ 二1 うみでおよく 幼 みんななかよく 幼II しゅイエスとともに 幼II みんなであまろう	そのかすいづくつ 幼 しすかにしすかに 二1 しゅにしがうことは 改二 しゅイエスはまことのぶどうのき 二2 やさしいめが 二2
7月	ちいさなあかちやんだったのに(A) 幼II おはよう 二2 うみでおよく 幼	うれしいあさよ 二1 うみでおよく 幼 みんななかよく 幼II しゅイエスとともに 幼II みんなであまろう	そのかすいづくつ 幼 しすかにしすかに 二1 しゅにしがうことは 改二 しゅイエスはまことのぶどうのき 二2 やさしいめが 二2
9月	あつちのいえから 二2	みんなであまろう	やさしいめが 二2
10月	ちから 幼II どもちいつぱい 幼II	ちから 幼II ありがとう 幼II	ちから 幼II ありがとう 幼II
11月	ありがとう 幼II おいのりおいきくだけでも 幼 はなけにおやさい 二2	はなけにおやさい 二2 おいのりおいきくだけでも 幼 アドベントクランツに 幼II いちばんはじめのクリスマス とおいとおいむかし 二2 アドベントクランツに 幼II いとばんはじめのクリスマス グローリア 幼II	はなけにおやさい 二2 おいのりおいきくだけでも 幼 アドベントクランツに 幼II かみさまのおやくそく 幼 麻ニフイカート 改二 熊立ちの歌 二2 しすか夜 二2 やさしいひつじかい 幼II こわがなくても 幼II かいはおげにすやすやと 改二 両手いつぱいの愛 幼II ひとりひとりのなをよんで 幼II ひとりひとりのなをよんで 二2
12月	とおいとおいむかし 二2 アドベントクランツに 幼II いとばんはじめのクリスマス グローリア 幼II	いちばんはじめのクリスマス とおいとおいむかし 二2 アドベントクランツに 幼II いとばんはじめのクリスマス グローリア 幼II	とおくのひがしから 二1 イエスがここに 新讃 いちばんはじめのクリスマス とおいとおいむかし 二2 クリスマスのおほしさま 天使たちのうた 君は愛されるため生まれた ワーIII
1月	かみさまにかんしや 二2 どんどこどんどこ 二2	しゅイエスとともに 幼II きょうもみんなに 二2	両手いつぱいの愛 幼II ひとりひとりのなをよんで 幼II ひとりひとりのなをよんで 二2
2月	かみさまにかんしや 二2 どんどこどんどこ 二2 あそんでいても 幼II	まもり 幼II うたいまじよう 二2	わたしたちはろばのこ どんどこどんどこ 二2
3月	あかね 幼II ちいさいイルのちが 二2	ちいさいのちが 二2 みみをすまして 幼II	喜び広げよう ワーIII ひとりひとりのなをよんで 幼II どんなにちいさい 二2 おさげしましよ 幼
2010年度4月	ちいさいおでて 幼 おいのりしましよ 二2 おかあさんだいすき 幼II うれしいあさよ 二1 はなもとりもめがさめて 幼	どもちいつぱい 幼II いのりのはなかご 幼 おさげしましよ 幼 あかるいあさを 幼 はなまはなよ 幼 このはなのように 幼II ばらばらおちる 幼	ありがとう 幼II ちいさなあかちやんだったのに(B) 幼II おかあさんだいすき 幼II このままの姿で ワーIII さあてをくんで 二2 うれしいあさよ 二1 ちいさなはなが(B) 幼II このはなのように 改二 どんなにちいさい 二2 そのかすいづくつ 幼 しゅわれをあいす 二1 喜び広げよう ワーIII
5月	うれしいあさよ 二1 はなもとりもめがさめて 幼	うれしいあさよ 二1	おさげしましよ 幼
6月	おでてをパチパチ 幼II このはなのように 幼II おはよう 二2	みんななかよく 幼II うみでおよく 幼	喜び広げよう 二21
7月	ちいさなあかちやんだったのに(A) 幼II うみでおよく 幼	みんななかよく 幼II うみでおよく 幼	喜び広げよう 二21

・幼児さんびひか…幼II
・幼児さんびひか1…二1
・幼児さんびひか2…二2
・改訂版こどもさんびひか…改二
・クリスマスのおうた…ク
・ワーシップ&プレイズIII楽譜集(小牧者出版)…ワーIII
・讃美歌21…讃21
・新生讃美歌(日本バプテスマ連盟)…新讃

外部評価委員からのコメント

筆者（太田雅子）は北陸学院幼稚園のアドバイザーや学校外部評価委員として、この幼稚園に関わり、幼稚園の保育内容や保護者との関係について観察させてもらった。またそこからキリスト教保育における保育実践とはどのようなものを学ぶ機会を得てきた。その中で気付いたことは、教師たちは、イエス・キリストの愛のもとに生かされ、共に成長することを喜びとするという姿勢で、子どもや保護者、学生（実習生）と向き合っているということであった。教師たちは、園児一人ひとりには神から託された大切な存在であると捉えて日々の保育にあたっている。そのことが教師たちの言動を見てよくわかる。また神さまが私たちを愛されたことに応えて互いに愛し合う生き方が培われることを目指していることが、保育内容（礼拝）から知ることができる。個々の能力（賜物）や興味・関心を尊重し、それぞれが自分の好きなこと・得意なことを発見し、それらを他者のために用いたり仲間と協力するよう励ます様子が見られる。さらに教師たちは子どもたちの話をよく聞き、子どもたちが自分の考えや気持ちを言葉で表現するように促している。集団生活であっても教師と子どもが対一で関わる、会話する姿が多く見られる。こうして子どもたちは教師や友だちとの交わりの楽しさを体験し、また助け・助けられる体験を積み重ねている。このように信頼関係が築かれる中で、子どもたちは礼拝で聞く神さまの御言葉を素直に受け入れ、それを実践しようとする態度が養われるのだと考える。

家庭において病気で幼稚園を休んでいる友だちのために祈っている我が子の姿を目にして感動し

たことを何人もの母親たちが報告している。また満3歳児クラスではごっこ遊びの食事の場面で、お祈りをしてからごはんを食べ出す姿が見られるという。これらのことは、祈りは楽しいものだと子どもたちが捉えているからだと思う。幼稚園では一日のさまざまな場面で教師や仲間と一緒に祈る時を持っている。普段から周囲の人々との関わりの中で、自分は大切にされていると感じることから来る安心感に加えて、神様の恵みや守りに感謝するひと時がさらなる落ち着きを与えているのではないかと考える。病気で休んでいた友だちが元気になって登園して来た時、それを皆で喜び合う。休んでいた子も自分のためにクラスの友だちが祈ってくれたということで感動する。こうした安心と満足感を与える園の環境・雰囲気、子どもたちに神さまを身近に感じ取らせているのだと考える。第一幼稚園の子どもたちは賛美歌が好きである。子どもたちは生活そのものが喜びと感じられる時、賛美歌を口ずさむ。与えられた命を喜ぶことができる環境を作り出すこと、それぞれがイエス・キリストのまなごしを受けながら個々の思いや感情を超えた広がりの中で互いに愛し合う生き方が育つ場を形成することが、キリスト教保育において重要であることを、北陸学院第一幼稚園の実践から学ぶことができる。

<参考文献>

- 1) キリスト教保育研究委員会「新キリスト教保育指針」
社団法人キリスト教保育連盟 2010
- 2) 赤崎ユリ子 尾上明子 茂純子 松浦八重子「レギーネ・シントラーの『希望へと育む』～要約と解説～」